

8) クサギ=臭木

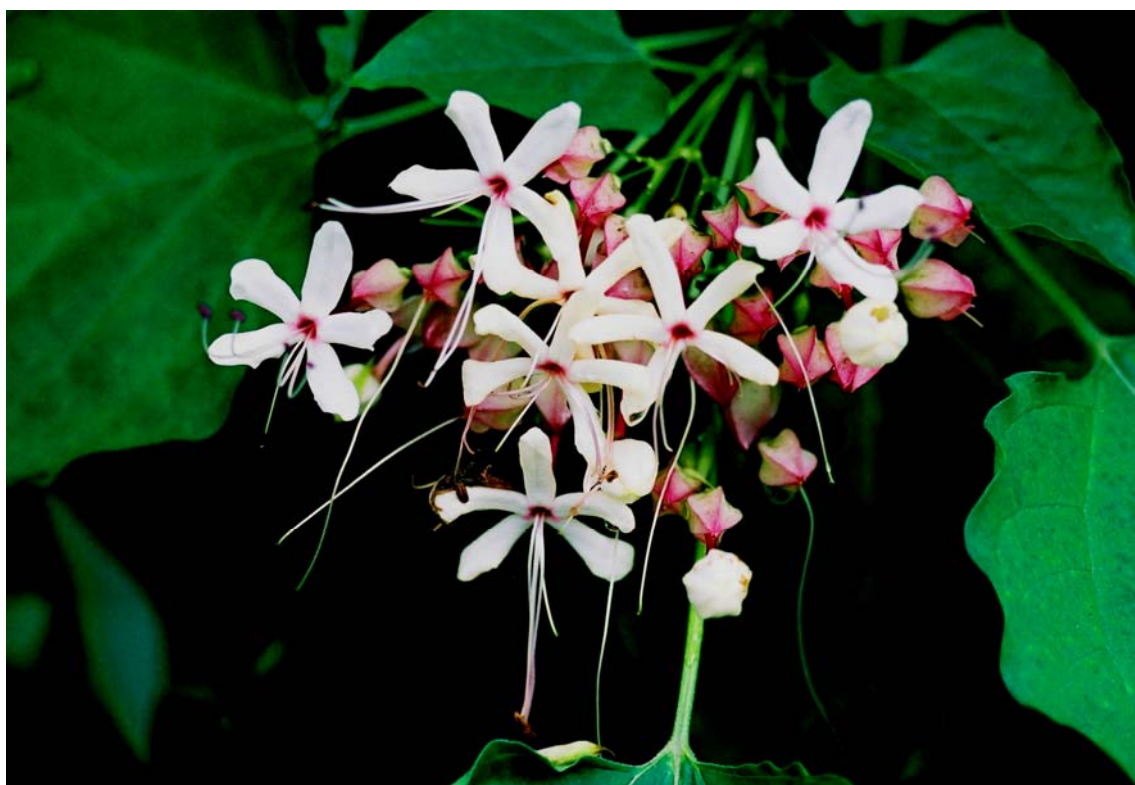
クサギはクマツヅラ科の落葉低木ないしは小高木で、日本各地の陽当たりがよい林縁によく生える。樹皮は灰色で樹高は3m程になり、上方で枝分かれする。葉は対生して、大型の三角状卵形で先は鋭くとがる。葉には長い柄があり、触れると独特の臭気を放ち、これが和名の由来になっている。7~9月頃枝先に集散花序を出して、先端が5裂した筒状花を多数開く。萼は5深裂した紅赤色をしており、花には強い芳香があり、昆虫類がよく集まる。果実は青紫色の球形で、青緑色の染料をとるのに用いられ、現在でも草木染などに利用されている。日本以外では朝鮮半島、中国にも見られ、クサギ属は世界では熱帯、亜熱帯を中心に約400種が分布する。別称としてはクサギリ、クサギナ、アマギ、トーゴロノキ、トンノキなどと呼ぶ地方もある。またアイヌではソコニと呼んでいる。学名は『*Clerodendron trichotomum*』で、属名は運命を意味する「cleros」と、樹木を意味する「dendron」との合成語である。当初セイロン島に自生する2種類が注目され、これを幸運の木=arbor fortunate と不運の木=arbor infortunate と名づけたことにより、運命の木となったものである。種小辞は3分岐したという意味で、枝分かれした樹形に由来する。中国での呼称は『臭牡丹樹』または『海州常山』(カিশユウジョウザン)で、果実を『常山の実』と称して染料として用いる。クサギの果実は保存が難しいので摘み取った後、直ちに染色に用いる。媒染剤は不要だが重クロム酸ナトリウム液につけると染料が定着し、綺麗に染め上げることができる。江戸時代以降になると、青色に染めるには主に藍(06-03-02 藍の項参照)が用いられた。藍玉は長期間保存することができる上に、藍染は色落ちしない利点があったが、製法は必ずしも簡便なものではなく、藍玉を作るにはかなり高度な技術が必要であった。その上、藍染めには発酵がつき物だったから、温度の調節や攪拌などをマメに行い、発酵を促進するために、長い時間と労力と、それに何回も染めるために、かなりのスペースも必要であった。このため江戸時代にはクサギを用いて、比較的簡便に水色に染めることも少なくなかった。またクサギ染めは媒染剤として硫酸銅を用いると明るい青磁色に染め上げることができる。

クサギの若葉は茹でて食用にすることもでき、茎葉の煎液はリュウマチや高血圧、神経痛、頭痛の治療に利用され、根皮の煎液は利尿剤として用いられている。またクサギの仲間には観賞用の種も多く、アフリカ原産の源平クサギは特に美しい。

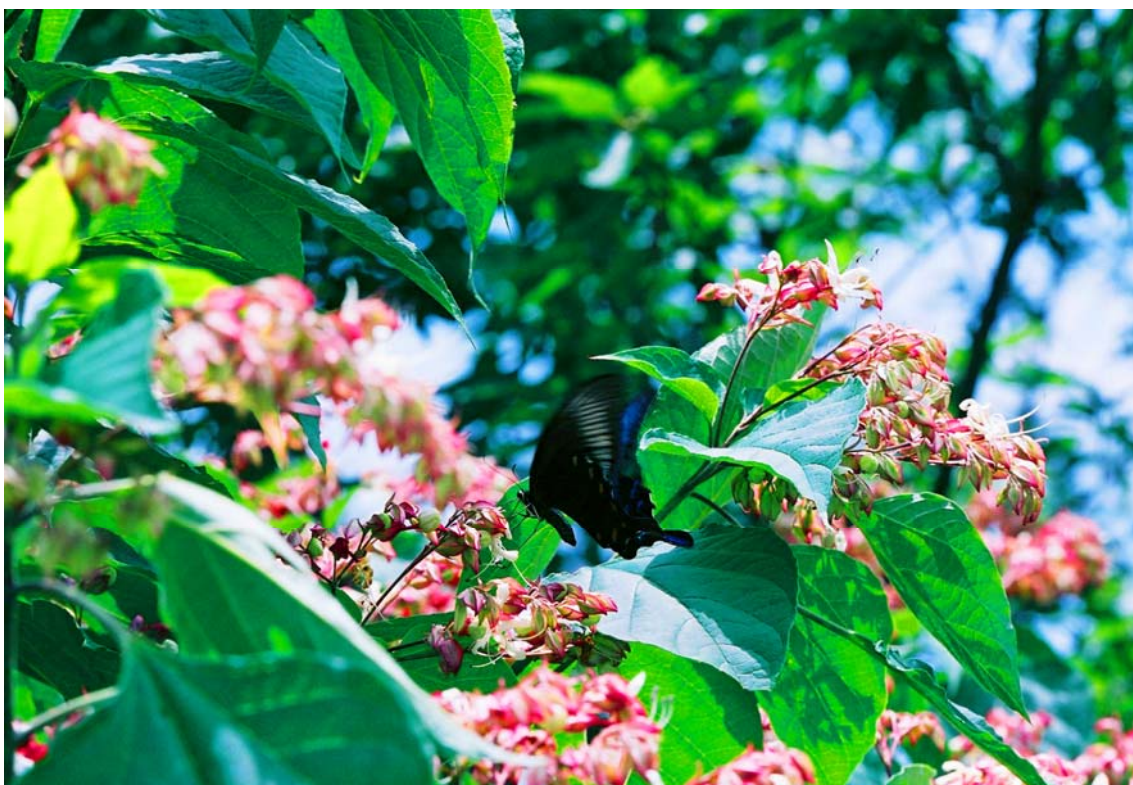
7月中旬を過ぎるとクサギの花には、アオバセセリなどのセセリチョウの仲間やヒョウモンチョウの他、ミヤマカラスアゲハという蝶がよく吸蜜にやってくる。この蝶は前述のキハダを植樹として育ち、成虫になるとクサギの花を訪れる。標高1,000~2,000mぐらいの中部山岳地帯に多くみられ、日本では最も美しいアゲハチョウの仲間の一つである。この点でクサギの花は蝶達にとってはトラノオと同様、この季節、美味しい食事を提供してくれるレストランなのである。



田圃の縁で育っているクサギの木。クサギは通常、林縁などで育つことが多く、陽当たりのよい特等席で育つことは少ない。このためかびっしり花をつけていた(群馬県高崎市)。



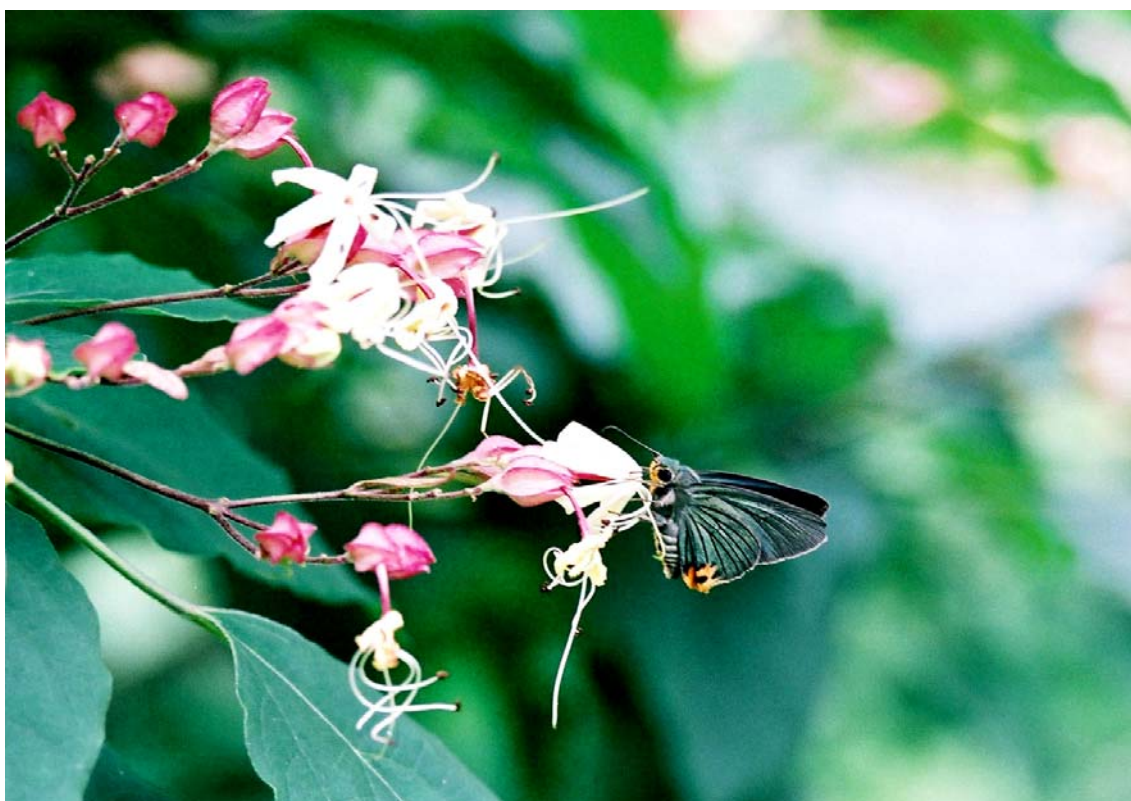
クサギの花(埼玉県寄居町)。



クサギの花にやって来たミヤマカラスアゲハ、この蝶はクサギの花によく集まってくる。一方平地ではカラスアゲハが吸蜜にやってくる。おいしい蜜が多いのだろう(栃木県那須塩原市)。



クサギの花の蜜を吸うミヤマカラスアゲハのみ(群馬県上野村)。



クサギにやって来たアオバセセリ、どちらかというとな暖地性のこの蝶も、地球の温暖化で那須あたりでもよく見られるようになった(栃木県那須塩原市)。



クサギの近縁種に源平クサギがある。紅白の花被を源氏と平氏に例えたものである。つる状に伸びるため源平カズラとも言う。学名は『*Cerodendrum thomsoniae*』である。 [目次に戻る](#)